

駒の館だより

明治鍼灸短期大学図書館報

第 2 号

昭和 58 年 3 月 25 日 発行

明治鍼灸短期大学附属図書館

〒 629-03 京都府船井郡日吉町
TEL. 07717-2-1181(代)

私 の 初 夢

図書館長 武 田 創

一昨年十月、本学教授として就任以来約一年半経過し、本学の様子もおおよそ理解もし、またその空気にもなじんで参りました。

その間、昨年四月には附属図書館長を拝命し、暗中模索の状態、ひたすら前任者の高野教授の敷かれたレールの上を走って参りました。すなわち、大学附属図書館の使命並びに機能として、研究に関する情報の蒐集、整理、学生の勉学に必要な図書の実、諸設備の充足等でありました。また短期大学より大学へ昇格のため図書館側よりのお手伝いも若干致しました。

待望久しかった大学への昇格も文部省より本年 2 月 4 日付で認可せられ、今後尚一層、附属図書館の充実と、その使命、機能の達成を期したく、次に私の個人的な希望を述べて、本誌への投稿の責をのがれさせていただきます。

1. より多く、より良い情報の蒐集と整理には多大な経済的負担を伴うものでありますが、一般に限られた経済力の下で、より効率的にその使命機能を達成するためには、日常、情報蒐集の手段に留意し、時にはそれを洗いなおし、その時代に適当な情報を把握するように努力し、限られた予算を有効に運用するよう全学特に研究従事者のご努力を期待したい。

2. 本学の性格上、鍼灸に関する情報については、古今、東西にわたって蒐集、整備、充実し、本邦のみならず東洋は勿論、グローバルな

ニーズに応じ、これによって本学附属図書館としての特徴を誇示すると共に、医学研究の情報の相互交換の一翼を分担いたしたく、このため本学関係者は勿論、鍼灸に関与される多数の方々のご援助を求めたい。

3. 学生の学習並びに卒後教育を容易化するとともに助長することは甚だ重要である。殊に、視聴覚資料による自学、自習の機運を増進するための諸設備を附属図書館に現在以上に早急に充足したい。尚、その資料は既製のものでは勿論、より教育効果を挙げるためにも、その製作には甚だ労苦と負担を伴うものであるが、経験の豊富な当該教科担当教官の自作によるものを完備するとともに更にその学外への発行をも望みたい。

4. (3)と一部重複するが、教育資料の製作、研究発表、情報の提供等に必要な機械器具を常備し、その運営、操作に必要な人員を配置すること。これには経済的に可成りの負担を伴うこととなるが、本学の発展とともに、やがてクローズ・アップする問題と思われる。その際、図書館に集中化することも一案ではなからうか。



A 君 に

学科長 阿 多 実 茂

大学に入学したときは、都会から離れた山のキャンパスの中で君は生き生きとしていたのに、最近元気がないようだね。

君達の未来を語るころ、それが大学なんだと僕は君に会った最初に言ったのをはっきり覚えていて。そのためには先生方と君達とが、学ぼうとする意志で強く結びついていることが大切だとも述べた。

君達がどれだけの能力をもっているか、どれだけの知識をもつかということだけでなく、どれだけ学ぶ意志をもっているか、それをどうつらぬこうとしているかによって、大学の生命は決定づけられる。学生の学問への意欲と学ぶ努力こそ大学を活かす力だと思うよ。

医学の研究や医療を生涯の仕事と自ら決心し、将来その天職を通じて、世のため、人のために役立てたいと初心を述べた君自身をあらためてふりかえってごらん。医学を深くしてゆけば、病んでいる人、苦しんでいる人、人生の幸、不幸、人間の生死に深い考えをもたざるを得なくなる。当然、自らの人生にも深い思いをするようになる。

自分の人生を粗末にしない、一回きりの誰の

ものでもないものを、深いもの、広いもの、美しいものを見つめる目を養って生きてほしいですね。

もし生活が教室中心になりすぎているとすれば、決して十分なものではない。本当の勉強は教室よりも、教室以外の勉強が大事で、知識を仕入れるということではなく学問をすることだと考えてほしい。

医学の骨組みの内容には、自ら関連良書を読み肉付けしなければならない。人生は短く、時と力には限りがあるから、なんらかの形で君の魂を高揚し精神的な富を増し一層内容のある生涯を送る上に役立つ良書もくり返して熟読し、これを自分のものに形成せねばならない。それには労苦と思索能力とを要求されるが、君の忍耐力、読書力を無視しないでつとめてほしい。

学生の頃、実社会に役立つものにと心掛けて読んだ本は、卒業してみても余り役に立たなかったと君の先輩がつい先日話していたよ。

現在、過去の区別なく、多くの良き人々に接し、話し合えるのも書を読む人生の喜びです。ともあれ、君にはもっと元気を出してほしい。暇を見つけてまた話しかけて下さい。

つれづれなるままに

人文科学教室 多 田 建 治

「つれづれなるままに、日ぐらし、硯に向ひて……」は、有名な徒然草の序の段の書き出しであるが、「つれづれなるままに、机に向ひて、書を読みふける」ことなどは、読書の妙味であると思う。学者とか、大学の教官とかになると、研究のため、論文を書くために読む本や、講義の準備のために本を読むことは、なにか、読書というには値しないような気がして仕方がない。

専門書を読むことはあたり前のことなので、履歴書の越味を書く欄に、読書と書いてよいのだろうかどうかと、しきりに疑問に思えて、ふんぎりのつかないこともある。

大学に入るまでは、国語が一番の苦手であった私には、中学の国語の教科書に出ていた、徒然草の一章がとくにいやだったのをはっきりと覚えている。大学に入ってからは、ある本との出

会をきっかけとして、本の洪水の中に浸って以後、数多くの本と出会い、数多(あうた)の遍歴を経てきたが、最近、四十近くになって、一番好きな本がこの徒然草である。旅行したり、ちょっと出かける時も、伴侶のように文庫本を持ち歩くことが多いのである。

その第七段に、「命長ければ恥多し。長くとも四十(よそじ)に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ」とあるが、勿論、この時代には、平均寿命が今の半ばほどだっただろうから、ほどほどの年令で死ぬのがよいと言っているのだらうけれども、徒然草のような本は、四十年近く生きてみて、やっと面白くなるのかもしれないと思ったりもする。

よく考えさせられるのは、第七十二段であり、これは大好きな箇所なのだが、「いやしげなるもの。ゐたるあたりに調度おほき、硯に筆のおほき、持仏堂に仏のおほき、前栽に石草木のおほき、家の中に子孫(こむまご)のおほき、人にあひて言葉のおほき、願文(ぐわんもん)に作善(させん)の多く書き載せたる。おほく

てみ苦しからぬは、文車(ふみぐるま)の文(ふみ)〔本箱の本〕、塵塚(ちりづか)のちり(ごみためのごみ)」とある。

古典の好きな私も、現代っ子の要素おおありで、我が家には、文明の利を備えた調度が多くあり、まだまだ精進が足りないものと自認している。ただ、本だけは、年令の割には多くもっている。ただ、人からも言われることが多い。しかし、専門書以外の本は、まさに、つれづれなるままに買いあさったもので、言ってみればガラクタ集めにすぎない。

本の数が多くなると、狭い我が家では置き場所に困り、一度、この際少しは減らそうと思って、古本屋にガラクタの本を持って行ったのだが、定価の一割にも売れないことがわかったので、それならと思いやっぱり持ち続けている。兼好が、本箱の本が多いのは見苦しくないと言ってくれているのがせめてもの慰めであるが、実際、本というものは、つくづく、「知的なごみ」だなと思うものである。

〰〰〰〰〰〰

「読書百遍……」

自然科学教室 森本安夫

「量の変化(増大)は質の変化へと転化する」一有名なそして少々陳腐なマルクスのテーゼである。幸か不幸か彼の提唱した生産力の増大による資本主義の共産主義への転化は、豊かさの前に脆くも崩れ去ったが、彼の残した一見哲学的な警句は現代においてもその光輝を保っている。上の句はそのようなものの一つだろう。

「読書百遍、意自ら通ず」一読書あるいは学習に関してマルクスのテーゼを翻訳すればこうなるのであろうか。私見だが、この句は一つの方法論を含んでいる。その要点は記憶である。ある理論またはテキストを理解するには、解っても解らなくても読みなさい。何度も何度も繰り返し、同じ文章を、そして同じページを。百回も読めば、まあ普通の人なら覚えてしまうだ

ろう。覚えてしまえば本質的には解っていないとも解ったような気になるものである。そのような気分になることは重要である。そうなれば本当に解ってしまうものであり、そこからの更なる発展もあり得る。これを身体の一部にしてしまうと称している。

これが実行されるには少くとも二つの条件が必要である。第一にその件に関し興味ないしは必要性を抱き続けること。好奇心の強い人、物事に執着する人は往々にして成功することが多い。「成功への鍵は頭の良さではなく、成功または成就することへの強い願望である」とは古今の賢人の繰り返し言い古してきた言葉である。第二の点はスタミナである。

解りもしないことに繰り返しアタックするこ

とは弱い精神をもってしては不可能である。

話は外れるが、麻雀の点数、牌を見ただけで「はい、2千オール」とやる人がある。私も人並みにやったことはあるが、未だに指を折らねばならない。麻雀が好きで徹マンをやる体力があれば簡単なことらしい。上述のこの良い例ではあるまいか。

話は当然のことながら勉学の話に移る。単位を落とす人が矢鱈目につく。そんな時、私の推薦する勉強法は至って簡単である。特に本学の如く目的の明確な学校では効果があると思う。それは与えられた教科書と、自分のとったノートに「読書百遍」することである。

要するに覚えてしまいなさいと言うこと。このような過程にある者にとって図書館にある種々雑多でかつ高度な本は無益どころか有害でさえ

ある。本当に図書館が必要になってくるのは、それ以後のことである。

我々研究者がよく犯す誤ちは多くの文献、情報に目を奪われて、それらを勉強するの余り自分の仕事、研究活動が進まないことである。数多く読むことよりも先づ目先に必要なことをしっかり読み、記憶する、そんな作業をした後でなければ、高度な本も本来の輝きを増してはくれない。徒らに背伸びすることなく確実な知識、技能の習得に心掛け、卒業と云うノーマルな事態をあわてふためくことなく迎えてほしいものである。

以上、図書館不要論の一説でした。お粗末！

追記、上記の文中、最後の節は、単位を取ると言う最低限の必要性のためのものであります。くれぐれも誤解のなきよう。

中医学の科学的現代化へ

東洋医学教室 黄 志 良

科学学は科学自身を研究する学問である。また科学的科学とも称する。科学体系の結構およびその運動規律を利用して、各部門学科の発展と趨勢の予測を行い、その科学の正確な研究方向を選択するのが科学学の重要な任務の一つである。

現代科学の高度な分化と高度な総合性は現代科学の整体化趨勢を導き、各部門科学の日益しの緊密な連系と相互滲透の統一的科学体系を形成して、多層的縦横交錯の脈絡系統を構成している。各部門学科のこの科学総体系中での地位と作用は各部門学科とその他学科との相互関係の形式およびその発展方向も規定する。

八十年代は中医学において、分子形態学（解剖学も含む）、分子生物学、分子生理学、分子病理学、分子薬理学、生物医学工程と遺伝工学等、現代科学知識と方法を応用する年代である。これら学科を応用して、中医学陰陽学説、五行学説、運氣学説、臟象学説、経絡学説、気

血津液学説、病因学説、病機学説、診法学説、弁証学説、治則学説、本草学説および方剂学説等々の本質を科学的に検討し、現代科学の技術方法を用いて、中医治療の有効な病例、病種に対し、実験研究と総合分析を行い、以て中医学と現代科学の総合応用へと発展させることによって、中医学の現代化建設は成し遂げうるのである。

中医学陰陽学説と五行学説の展望は cAMP と cGMP, 副腎HORMON, CHOLINE, 交感副交感、人体内の酸、アルカリ度等に存在する双向調節作用をもって、中医学の陰陽、虚実の本質を揭示し、それによって神経一体液調節と各種代謝機能関係の变化規律と新概念を究明することである。

中医学四診法の客観的研究においては、八十年代に光、音、電、磁学等新しい技術を採用すれば、中医診断学は新しい段階へと発展する。

中医学治則の八法および補陽、活血、化湿、

理気法等の研究に対しては、その概念を現代科学的に究明する。

中医臟象学説に対しては、腎（先天）本質と脾（後天）本質の研究基礎の上で、更に進んで、肝、心と肺本質の新しい検討を行い、もって中医学基礎理論と弁証施治の発展を補助することである。これは疑いもなく八十年代の中医学の生理病理学の内容を新しく、大きく変えて発展させる。

中医学を如何に現代化するかの問題は、中医学内部の構造を研究整理するのが重要急務である。伝統的中医学の分類から考察すれば、中医学の基礎医学部門の中医基礎医学と中医薬物学は、まだ分化が徐々である。しかし臨床医学部分は系統的に分化されている。例えば、内科、外科、小児科、婦人科、産科、眼科、耳鼻科、鍼灸科等臨床学科に分化されている。

中生理学、病理学と診断学は人体生命と疾病過程を研究する最も基本的の分支学科である。必ず多種学科の知識と多種技術手段を総合運用して、中医学理論中の生理学方面の陰陽、五行、臟象、経絡、気血津液と病理学方面の陰陽、寒熱、虚実、六経、衛気營血等に対する物質基質およびその運動形式を深く研究することによって、中医学は根本的現代化が実現できるのである。

特に、針灸学においては、将来分化の必要性がせまられている。例えば、内科針灸、外科針灸、婦人科針灸、産科針灸、小児科針灸、眼科針灸、耳鼻科針灸、針麻酔、老人科針灸、高血圧病科針灸、糖尿病針灸等に細分化して、内容を現代科学的に発展させるべきである。こうしてこそ、世界医学領域内にて初めて頭をもたげて、世界人類のために貢献することができる。

針灸学はなんといっても、経絡学説の実質の探索を通じて、経絡感伝の規律を既に認識している基礎の上で、経絡に関する概念を究明し、穴位に対する特異性、作用、針灸手法と子午流注の研究を一層促進させなければならない。

針灸学の書籍としては、針灸学古典医籍、例えば、「靈枢」、「素問」、「難経」、「甲乙経」と「針灸大成」等文献の整理研究に努めることである。

鍼灸大学においては、当量よりも質の高揚

に努め、人材を養成して、鍼灸医学をして、社会の要望に応ずるのが当面の重要な任務になるであろう。鍼灸大学は鍼灸研究所の設備を充実して、集団的に系統的分化研究に励むことである。例えば第一研究室（神経系）、第二研究室（内分泌系）、第三研究室（循環器系）、第四研究室（呼吸器系）、第五研究室（消化器系）に分科して研究に励み、鍼灸学術論文の国内外交流を通じて、八十年代に鍼灸学を現代科学的な高度な水準にまで高めなければならない。

医学は人体の生命現象および疾病と闘争する有効な手段を研究する応用科学であり、技術科学と緊密に連系している。

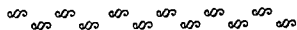
生命活動には物理運動と化学運動が含まれており、また人体のリズム（節律）と宇宙のリズム（節律）の発現により基礎医学と物理学、化学、生物学、天文学等基礎自然科学が構成する科学体系の基本構想と不可分の連系がある。

中医学と西洋医学は医学科学の二大体系である。これらは人体生命と疾病およびその治療の同一客体に異なる理論をもって解釈する。このような現象は自然科学体系中でしばしばみられることである。科学の発展は異なる客体に対し、異なる理論が形成される。また同一客体に対し、異なるいくつかの理論が立てられる。科学学は異なる時期に立てられて、異なる現象を各種理論での解釈および同一研究領域内で異なる理論を総合概括し、一つの新原即をもつ新理論にするのである。各部門の学科内部において、このような発展趨勢に処して、同一客体の異なる理論を総合して、概括性新理論にする。

中医・西医は同一階層、同一学科内で交叉して存在する二大体系である。それらは相互に連系し、相互影響すると同時に、また各自は自然科学体系中で、異なる階層の学科として、互に移植し、滲透して連係をもっている。例えば生理学、病理学、医学生物化学等をもって、中医基礎理論を解釈している。しかし、現代の西医基礎学もその基礎は自然科学とその他学科が西医学に向けて大量に移植し、滲透した状況の下で形成されたものが西医伝統の理論に印記されたのである。西医が現有の科学知識にて、中医学に対する研究を行うとすれば往々に中医学内部の西医学が既に知るものを探検する傾向が生

じる。この傾向は中医学理論中の西医学で理解できない人体生命と疾病過程の物質基質と運動形式を発現するのに不利である。必ず中医基礎理論および臨床研究の中で、自然科学基礎学科の

科学方法および現代化の技術手段を大量に吸収することによって、中医学の科学的現代化が成し遂げられる。



西洋図書館小史 (その二)

附属図書館 八木克彦

(承前)

同じ頃 (BC 200年頃)、小アジアの北西部、アッタロス王朝の首都ペルガモン (Pergamon) では、パピルスの入手難からパーチメント (Parchment—羊皮紙) が書写材料として使用されていました。その頃アテナ神殿の一部に造営されたペルガモン図書館は、アッタロス I 世、エウメネス II 世 (在位 BC197~159) の治下で大いに発展したのですが、BC43年に、アントニウスが、この蔵書20万冊をクレオパトラに贈ったとされており、このことが事実なら、ペルガモン図書館は実質的にはアレキサンドリア図書館に吸収合併されたこととなります。

それはさておき、山羊や牛の皮を鞣して作ったパーチメントは、パピルスが巻物の形をとったのに対して、冊子形態をとることもでき、両面使用が可能で且堅牢でもあったので、その後広くヨーロッパ伝播し、15世紀中葉のグーテンベルグによる活版印刷術の発明まで永く使用されたのです。

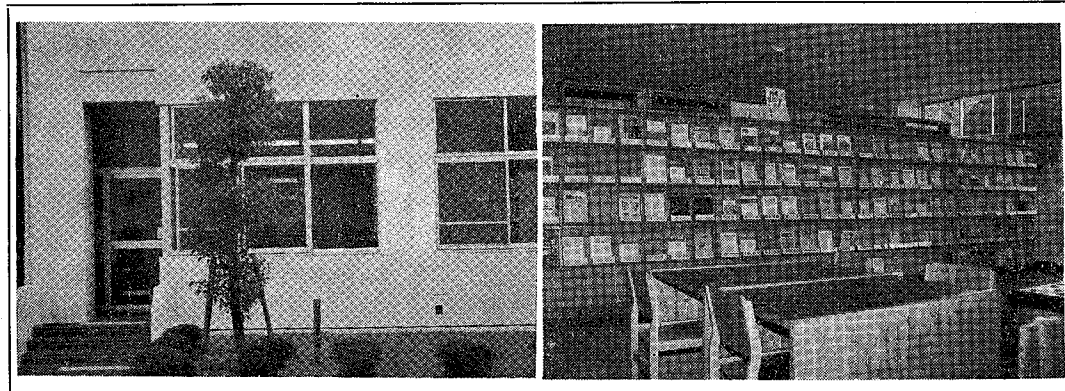
羊皮紙にまつわる興味深い話に『死海文書』の話があります。この物語は、ベドウィン人の

羊飼いの少年がクムラン (死海北西岸に近いところ) 地区で羊を追って、とある洞窟に入ったことから始まります。羊を追いつくために彼の投げた石が粘土製の古い壺に当たって音を立てました。近寄って壺の蓋をとってみると、亜麻布で丁寧に包まれ、タールで封印された皮の巻物が入っていました。少年の発見した壺は2年後エルサレムの古物商の手に渡り、これが学者の眼にふれて、死海西岸の洞窟探査の道が開かれたのです。

1947年以降、数次にわたってこの辺り一帯が調査されたのですが、クムランの11の洞窟、ムラバートの4つの洞窟、ミルドの廃墟から発見された巻物は、前3世紀から紀元1世紀の間に書写された旧約聖書と、ユダヤ教の一派クムラン教団の教団規則を主とするもので、従来資料の乏しかった旧約時代と新約時代の空隙を埋める極めて貴重な資料となりました。

なお、最初の洞窟で発見された7篇の写本は、すべてエルサレムのヘブライ大学が入手し保管しています。

(附属図書館)



以上が、今世紀最大といわれる「死海文書」(または「死海写本」)発見の顛末です。

さて、ギリシャ時代には、アレキサンドリア大図書館のほか、プラトンの創設した学園に附属図書館があり、また弟子のアリストテレスも彼の有名な逍遙学派の学校(Peripatetic School)に図書館を持って、アレキサンダー大王の支援を得て多数の文献を収蔵しました。

このアリストテレス文庫は、その後数奇な運命を辿り、テオフラストス、ニレウスの手を経て、やがてアテネの富豪アペリコンの所蔵するところとなりますが、アペリコンの没後、ミトリダテス戦争のときに、ローマの將軍スラによって戦利品としてローマに持ち帰られ、やがて、軍人であり著述家でもあったアシニウス・ポリオ(Asinius Pollio BC76~AD5)の手に渡ったといわれております。(一説には、エジプトのアレキサンドリア図書館に移されたともいわれておりますが一。)

ポリオは、やがてローマ市内に大図書館を建設して、これを一般市民に公開しました。これが、ローマにおける最初の公共図書館です。

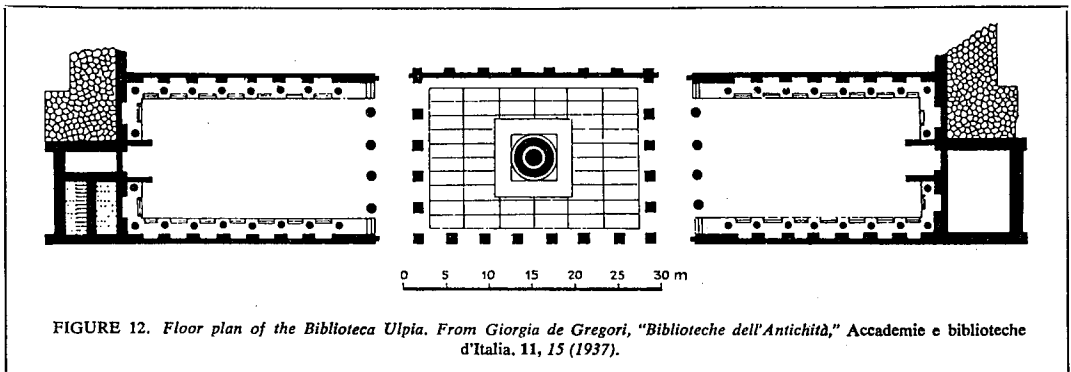
なお、ローマで最初に作られた図書館は、

に普及して、西洋文化の基盤を形成する上に大きく貢献したことにありといえましょう。

かのジュリアス・シーザー(102/100 ~ 44 BC)も大図書館建設の意図を抱いておりましたが、志半ばで倒れ、その計画を受けついでローマ初代皇帝アウグストゥスは、アポロ神殿内にパラティウム図書館を設け、また、オクタビアヌス神殿図書館を造営しました。

五賢帝の一人、トラヤヌス(Trajanus AD52 ~ 117)帝が113年に完成したウルピア図書館(Bibliotheca Ulpia)は、政治上の文書をも保管して、今日の国立国会図書館に似た性格をもっており、ローマ時代の代表的な図書館とされております。

ローマ時代には、初期の頃から bibliopola と呼ばれた書籍商が次第に発達し、市井においても富裕な人々は競って書物を手に入れて自宅を飾り、或いは私設の文庫を作りました。AD 79年のベスピオス火山の爆発で埋没した町ヘルクラニュームには、ピソスという富豪の別荘があり、そこから焼け残った蔵書が発掘されております。ともあれ、4世紀の中頃には、ローマ市内だけで、大小29の図書館が存在したと



(Encyclopedia of Library and Information Science vol. 26 所載)

BC168年に將軍エミリウス・パウルスがマケドニアを滅し、王の蔵書をローマに持ち帰って作ったものでした。

このように、ローマの図書館は、度々の軍事活動による戦利品としての図書が蔵書の基となりましたが、このことは、ローマ人が東方の高い文化に接して驚き、これを摂取吸収して自らの文化を高めようと努力したことを物語っております。ローマ文化の最大の功績は、東方ヘレニズム文化を受け継ぎ、これをヨーロッパ全土

いわれております。

AD395年、ローマ帝国は東西に分裂し、コンスタンチヌス大帝は、首都をビザンチンに移してコンスタンチノーブルと称しましたが、彼はここに大図書館を開設して、一般に公開しています。

このように輝かしいローマの図書館も、やがて内乱と北方民族の侵入によって、多くは荒廢に帰し、476年に西ローマ帝国が滅びると図書館もまた運命を共にし、ここに古代図書館の歴史は終りを告げるのです。(この項おわり)

近着東洋医学系図書一覽 (昭和37年4月以降収蔵分)

近世漢方医学書集成 63~69巻81~87巻92~95巻 大家敬節等 編 名著出版 昭57	六診提要 和漢医学 梁巖藏秘 医道の日本社 昭52
醫心方 卷第二 鍼灸 丹波康頼 編 至文堂 昭57	鍼灸茗話 全 石坂宗哲 医道の日本社 昭50
醫心方 卷第二十八 房内 丹波康頼 編 至文堂 昭57	鍼灸院経営事典 木下晴都等 医道の日本社 昭56
素問識 上巻・下巻 多紀元簡 續文堂 昭56	臨床読本 早崎 芳 早崎 芳 昭57
徂徠先生素問評 荻生徂徠 續文堂 昭55	東鍼研進歩集 昭和55年版 東洋医学研究財団 編 東洋医学研究財団 昭56
意積傷寒論類編 玉函書〔II〕 小曾戸丈夫等 築地書館 昭56	康治本傷寒論の研究 長沢元夫 健友館 昭57
金匱要略講義 湖北中医学院 編 武藤達吉 訳 素人社 昭55	新編目で見るツボの豆事典 芹沢勝助 健友館 昭56
カイロプラクティック 一脊椎手技療法— ベッパー, W著 間中 泰 訳 医道の日本社 昭54	脾胃学説の臨床 張海峯等 東洋医学国際研究財団 昭57
鍼灸臨床医典 間中喜雄 医道の日本社 昭56	千金方薬註附・真本千金方 松岡定庵 原著 医聖社 昭57
臨床経穴図 木下晴都 医道の日本社 昭56	本草図譜 復刻版 総索引 岩崎灌園 原著 同朋舎 昭57
杉山流三部書 杉山和一 医道の日本社 昭54	現代電気針治療学 関行雄 自然社 昭57
臨床にすぐ役立つはり入門 森秀太郎 医道の日本社 昭56	中医臨床講座(1) 神戸中医学研究会 編訳 燎原書店 昭57
診療夜話 死生要訣 全 石原保秀 編 医道の日本社 昭53	中医学入門 神戸中医学研究会 編著 医歯薬出版 昭56
鍼灸医術の門 柳谷素靈 医道の日本社 昭56	中医八綱解説 楊日超 編著 自然社 昭54
禁穴論 返し鍼法 柳谷素靈 医道の日本社 昭53	食物本草大成 第1巻~第12巻 吉井始子 編 臨川書店 昭55
実験実証 秘本一本鍼伝書 柳谷素靈 医道の日本社 昭56	催眠下物理療法の臨床 川井正久 川井中国医学研究所 昭57
図説鍼灸実技 柳谷素靈 医道の日本社 昭52	経別・経筋・奇経療法 入江 正 医道の日本社 昭57
知熱感度測定による針灸治療法 赤羽幸兵衛 医道の日本社 昭53	鍼の科学 Mann, Felix 著 西条一止 等訳 医歯薬出版 昭57
手根・足根針 張心曙 著 杉充胤 訳 医道の日本社 昭54	椿庭経方辯和訓 山田椿庭 名著出版 昭57
オイルマッサージ 今井義晴 等 医道の日本社 昭54	刺針療法の大系 —神経学的解釈による臨床応用— 国安厚臣 国安厚臣 昭56
経験漢方処方分量集 大家敬節 等監修 医道の日本社 昭56	針灸臨床 23000例 間中喜雄 監修 中外医学社 昭56
鍼灸病証学 前後編 本間梓白 医道の日本社 昭55	中国の薬用菌類 一効能と応用法— 劉波 著 難波恒雄 等訳 自然社 昭57
阿是要穴 鍼灸(一)、(二) 岡本為竹 一抱子 医道の日本社 昭51	漢方医学十講 細野史郎 創元社 昭57
診病奇佻 多紀莖庭 医道の日本社 昭51	臨床中医針灸学 黄志良 編著 臨床中医学研究会 昭57
按腹図解 太田晋齋 医道の日本社 昭52	中医処方解説 神戸中医学研究会 編著 医歯薬出版 昭57

あとがき

昨年のは後半は、4年制大学用図書の選定や発注、受入等の業務に忙殺されましたが、その甲斐あって文部省の審査にも無事パスし、本年2月には、正式に4年制昇格が認可されました。ご同慶の至りです。それやこれやで、本号の発刊がすっかりおそくなってしまいました。あしからずご了承下さい。

お忙しい中、ご寄稿いただいた各教室の先生方に厚く御礼申し上げます。 (K.Y.)